



図書館との出会い

瀬谷区 狩野 彰一

白いその建物が図書館であることはわかっていただけのだが、さしたる興味もなく、長い間、立ち寄ったためしもなかった。

ある日、私はひよんなことからそこへ入った。ポツカリと時間が空いた時、好奇心半分で見知らぬ場所へ足を踏み入れた経験は誰にでもあろうが、その時の私が、まさしくそれだった。

人にもよるが、初めてこういつた施設の扉を押す時は、ある種の緊張感を伴い、結構勇気のある一瞬でもある。しかし中の空気になじむのに、それほど時間はかからなかった。私はロ

ビーで新聞のフアイルをひろげ鷹揚に煙草の煙をくゆらせた。

ところが、どうしたことか、だんだん落ち着かなくなってきた。カウンターのむこうのおばさんの視線が原因だった。あちらにすれば、本を探すでもなく、うさんくさくも思えたのであろう。私は煙草をもみ消すと、追いついてらるるうちに、書棚の方へ歩いたのだった——出会いといえ、それが私と図書館との出会いであった。

数カ月後には、そのおばさんとは、すっかり顔なじみになっていた。「司馬遼太郎が好きなのねえ」「あら、周五郎にくらべたのねえ」などと、ひやかされたりした。

一冊一冊に心をゆさぶられ、戦国や江戸期を生き抜いた人々に思いをはせ、夜のふけるのを忘れた。心の中に何かははぐくまれていく手ごたえを感じた。

元来、図書館は受験生や、専門書を探す人々だけのものではない。一見の飲み屋に思いきって飛び込む感じで入館した、あの時の私のように、日常の中で図書館の必要性など全く感じて

いない人たちが、ある日、ひよっこり迷い込んで来る。それは選挙の浮動票のように、あてどない人々である。白紙の状態の人々とも言える。そういう人々を一定時間、そこにどめさせさまざまな色合いに染めて送り帰してやること——図書館本来の役割なんて、案外そんなところに置いておいた方がいいのではないか？ あたりまえすぎる図書館のこの作用をぬきにして図書館を論じて、はじまらない気がしてくるからである。

情報と図書館

教育委員会 山中 明彦

情報化社会といふことがさかんに謳われています。言葉の持つ意味と内容の吟味なしに、言葉だけが拡散して時代の雰囲気形成するのは日本社会の様式でしょうが、情報化社会とはどういう社会なのでしょう。いくつかの辞典を見たところの中に、「情報内容を的確にとらえ利用するものが、社会的に優位を占め、そうでないものは

他におくれを取るしくみの社会」という定義がありました。情報化社会の一面を捉えていますが、考えてみれば恐ろしくもありません。

この定義は、情報のもたらす格差を指摘したのもとも言えます。逆説的に言えば、情報は偏在してこそ価値があり、あまねく知れ渡ってはもはや情報ではなくなりませぬ。軍事・科学技術・企業情報などは当然多くの秘密を含み、全てが情報化されるわけではありませぬ。またニューメディアなどでの情報提供もそれを行えるのは資金力のある者であり、費用に見合うだけの商業化の可能な情報を選択され受け手に浸透していきます。受け手がそれらを記録し検証し、送り手に投げ返すようなことは大変なことです。

このような情報量や内容の両者の間の格差を正し、個別的・断片的な情報の全体像へ迫り比較するなど、補完の作業をする機会を多くの市民がもてるよう保障する場として、図書館が考えられないでしょうか。「情報は他人から提供される

ものであるが、知識は自身で獲得するものである。」——ある雑誌で目にした言葉ですが、情報化社会において市立図書館は情報と知識の違いを認識し、情報館になるのではなく、記録され整備された資料情報と知識の集積地になるべきでしょう。

それは情報の海に向かう市民が自ら知識を得て情報への接近を図り、また人間らしく生きるための糧を求める寄港地としての役割としてイメージ出来るのではないか。また、職員は独善に陥らない限りにおいて、市民との間に良い意味での緊張関係を結びながら、時代と社会に対する自分なりの切り口を持つことが必要では、などと思われる昨今です。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一二〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。